羊歯

第30號

1996（平成8年）

新ハイキングクラブ 横浜支部

羊　　歯

第３０號

支部結成４０周年記念号

（１９９６）

新ハイキングクラブ　横浜支部

『羊歯』　第３０号発行について

支部長　　石原　弘之

わたし達の横浜支部が、今年度で結成４０周年を迎え、会員の皆さんと共に喜びたいと思います。同時に今まで支部の発展に努力されてきた先輩各位に対し深甚なる敬意と感謝を申し上げる次第です。

この４０周年の記念行事として「羊歯」の発行と、「塔ノ岳」の集中登山を決定しました。「羊歯」の命名の由来については、既に前号で述べられている通りですが、「羊歯」の名称に恥じないように、会員一同と共に益々支部の発展に努めてゆきたいものと思っています。

皆さんもご承知の通り、当支部においても会員の高齢化が進んでいます。山行計画についても、充分なる検討と慎重な配慮のもとに、安全な山行を心がけたいものです。そして会員同志の親睦を深め、節度のある行動の中から横浜支部の伝統と言われる、家族的な仲間作りを強め、楽しい山行を続けてゆきたいものです。そして、次の「羊歯」発行の時に、思い出や新しい経験などを発表し合い、更に支部の発展の糧にしたいものです。

最後になりましたが、「羊歯」の発行に尽力してくださった、熊谷さんを始め編集に携わった方々に、深くお礼を申し上げます。

平成８年(1996年)　１０月　　日

カット・岡野　達　氏

横浜支部　ますます元気で

小　林　玻璃三

新ハイキングクラブ横浜支部、創立４０周年お目出度うございます。

４０年前、地域別に会員を調べ、その地区の中の委員に、支部を造らせました。当時は支部の基準を会員１０名以上としましたので、１０以上支部が生まれました。

その後、消滅した支部、新しく生まれた支部と変化がありました。歴史の重味でしょうか、現在の支部は、それぞれ特色を持って活動され、支部の姿も多様です。

横浜支部ニュースを拝見しますと、多士済々、活発に運営されておりますことが良く解ります。

今後とも、益々充実した活動をされますことを期待して、お祝いの言葉とします。

１９９６年１０月

「羊歯」 第30号 目　次

			頁
	『羊歯』第３０号発行について ……	支部長　石原　弘之	2
	支部４０周年を祝う ……	新ハイキング社社長　小林玻璃三	3
1	私の山旅フアイル ……	茂木　武	5
2	初心者登山教室の想い出 ……	小池　廣治	9
3	ジョギングに魅せられて ……	岡野　達	10
4	槍ヶ岳雑感 ……	広島　律子	11
5	幻の戸隠山行 ……	頼角　幸子	12
6	北アルプスへの想い ……	浦田　節子	13
7	わたしの横浜 ……	永井　和男	14
8	限りないロマンを求めて ……	古谷　芳子	17
9	山・新ハイとの出会い ……	熊谷　松治	19
10	みちのくの山 ……	沢野　正明	20
11	娘へのメッセージ ……	服部八重子	21
12	テクテク…テクテク ……	鎌田　善子	22
13	風に吹かれて ……	佐野淳一郎	23
14	山の思い出あれこれ ……	石原　弘之	24
15	Where is the bathroom? ……	祖父川精治	27
16	道南の山旅 ……	芹沢　隆仙	29
17	ブナ礼讃 ……	丹下　友恵	30
18	あるお母さんの山登り ……	長谷川美江	31
19	『傷だらけの百名山』 ……		32
20	北海道・心に残った山々 ……	御園　培博	33
21	奄美大島クルーズ ……	鈴木　力雄	36
22	さそわれて丹沢大山 ……	飯島　和子	38
23	山行の想い出 ……	星野喜美子	39
24	「塩の道」１２０キロの話 ……	山田　進	41
＊	ＳＨＣ横浜支部小史 ……		43
＊	支部山行記録（平成４年４月～８年３月） …		44
＊	横浜支部会員名簿（1996,9, 現在） ……		49
	カット「写真２枚」 ……	相川　平司	7, 26
	「花」２題 ……	岡野　達	2, 21
＊	編集後記 ……		51

私の山旅ファイル

甲斐駒－仙丈岳

茂木　武

8月1～3日、Y君と甲斐駒～仙丈岳へ登る。早朝の南ア林道を村営バスで北沢峠へ。車窓から甲斐駒、鋸岳の荒削りな山容が視野いっぱい、大きく迫る。北沢峠で朝食。甲斐駒へ8時半に出発する。途中仙水小屋で飲んだ水がおいしく、水筒の水まで入れ替えた。仙水峠、駒津峰と進む。岩場・はい松帯となり高山ムードを満喫。六方石からはガラ場の連続。頂上に着く。久し振りの甲斐駒である。山頂は霧の中、展望はゼロだった。帰路は双児山コース。霧も晴れ北岳と仙丈岳がその姿を現した。この日は長衛荘に泊まる。

翌朝は4時に出発。睡眠十分で快晴とくれば、後は朝食を何処にするかだけ。大平小屋のワキから藪沢コースへ。馬の背ヒュッテで休憩。お花畑がきれい。黒百合の群落に足もとまる。藪沢カールの斜面を登り稜線へ。仙丈岳の展望も素晴らしいの一言。やはり甲斐駒、北岳が抜群か。　（S61年8月歩く）

北八ツ－蓼科山

6月24日、梅雨の晴れ間に期待、夜行日帰りで北八ツ－蓼科山を縦走した。茅野から始発バスで渋の湯に入る。麦草峠への近道にとった冷山コースで道々可憐なコマクサ見る。麦草峠から茶臼山を過ぎ縞枯山へ。山頂手前には展望台。雨山峠で左折、縞枯山荘の前を通り溶岩の坪庭へ。ここでは観光客の間をすり抜け横岳めざす。北横岳は南峰に三角点。山頂からは樹林の中を一挙にくだる。

亀甲池は意外と明るい雰囲気。天祥寺平からは草原の緩い登りが続き、大河原峠に着く。小屋ではついに冷たいビールをあおった。蓼科山は登ってみて、さすがに大きさを感じた。14時に登頂する。山頂は大岩がゴロゴロした異様な風景だった。展望に恵まれず下山にかかる。帰路は北へ御泉水にくだった。そこには冷たくて、おいしい蓼科山の源水があった。　（H2年6月歩く）

空木岳

7月21日、夜行日帰りで空木岳へ登った。夏時間になったバス、ロープウェイ利用で7時には千畳敷へ。効率よく稜線に出て宝剣の岩峰をこえる。快晴の空に広がる展望。御嶽も雄大だ。右手に大きな三ノ沢岳が一緒に歩いてくる。濁沢岳、檜尾岳と順調に進む。振り返って見ると、今朝から歩いてきた山稜がうねうねと連なり、すでに遠く宝剣、木曽駒が望まれる。

空木岳が近くなってきた。右に南駒ケ岳も立派である。木曽殿山荘で冷たいジュースを飲む。ビールも買ってたおる巻きでザックへ。「空木岳を日帰りす

るなんて」と小屋の人。その小屋が次第に小さくなる。頂上と思い騙されたピークもあった。大きな岩場を次々にこえ、１３時３０分に登頂する。途中で連れができビールで乾杯した。素晴らしい展望にひとときを過ごす。

帰路は池山尾根をくだった。山なみの向こうには恵那山が、ゆったりとした山容を見せていた。（Ｈ２年７月歩く）

外秩父七峰

４月２１日、外秩父七峰縦走大会（４０.５キロ）に参加した。今日の目標は完歩と９時間。小川町を８時半と遅い出発になる。晴天に恵まれ日ざしが暑い。持参のムギワラ帽が大いに役立つ。過去の反省から最初はスピードをセーブ。笠山では少し遅れ気味。剣ケ峰まで来ても調子は出ない。ここで水を補給する。

白石峠でタラの芽を買う。これが気分転換で、足も早くなった。大霧山の展望は一級品である。両神山も見えた。登谷山ＣＰの時点では、かなり時間短縮していた。釜伏峠では現地の人たちが、日本名水と梅干しの接待をしていた。

いよいよ寄居めざしラストスパートする。左に荒川の広い河原と流れが見えてきた。蜂須賀城跡から左折する。長い正喜橋を渡った。寄居駅前でゴール。９時間は切れなかったが、昨年より好タイムが出た。私は満ち足りた気分で、東上線の電車にゆられていた。（Ｈ３年４月歩く）

北アルプス西銀座

８月１～４日、北アルプス西銀座を歩く。早朝の富山はまだ梅雨が明けず、小雨模様。有峰口－折立から入る。太郎平小屋へ宿泊手続きして、薬師岳を往復する。山頂は霧雨で展望はゼロ。小屋に帰って一息。日没前には東方の雲が切れた。素晴らしい夕景だ。ひととき小屋は外のほうが賑わっていた。

翌朝は緩やかな稜線を南へ向かう。ハイマツ帯の肩の広場から黒部五郎岳へ登る。霧雨でやはり展望なし。お花畑の急斜面をくだる。見返ると黒部五郎岳は、残雪豊かに見事なカールを見せていた。その日は双六小屋に泊まる。翌日も雨、これで３日連続。秩父平を上がると道はほぼ平坦。でも天候は更に悪化。稜線を吹き抜ける風は強く、雨がたたく。笠ケ岳山荘に着いた。

濡れついでにその足で笠ケ岳に登頂する。こんな天気でも小屋は満員だった。翌朝は雨も上がり、笠ケ岳もくっきり姿を見せた。穂高、槍と最高の景観のもと、笠新道を新穂高温泉へくだった。（Ｈ３年８月歩く）

奥穂高岳

８月２４～２６日、本部の奥穂高岳山行に参加した。天候にも恵まれ名残りの夏山を満喫した。早朝、新宿をバスで出発する。途中渋滞でバスが遅れ、上

高地の出発が午後にずれた。本谷橋を渡ると次第に急登になる。暮れゆく空に前穂・北尾根がくっきり見えている。涸沢ヒュッテに着いた。

翌日はいよいよ核心部を歩く。先ず北穂高岳へ。展望はむろん言うことなし。北穂南峰からくだりコルの手前で休憩する。つい眼が前方にゆく。ここから涸沢岳への岩場に挑む人々が見える。私たちもすぐその一員になった。三点確保を生かす所もあり、つかむ岩に快い緊張感。涸沢岳山頂に着いた。

眼下に穂高岳山荘が見える。山荘では夕食後参加者全員で、自己紹介とミーティングをする。翌朝は4時に出発、奥穂高岳を往復する。まだ暗くヘッドランプで登る。中天に月が明るい。岩場過ぎるとジャンダルムが眼前に見えた。奥穂山頂でご来光を待つ。茜色に染まってくる山の夜明けは素晴らしい。

この素敵な山行を実現された係の石橋さん、サブの中村さん外の方々に心より感謝の意を表します。新ハイも結構やりますね。　（H３年８月歩く）

三頭山－高尾山

４月１２日、変則日帰りで三頭山－高尾山を縦走した。誰が考えたのかこの企画、常識の枠をこえた魅力あり。山友５人で挑戦した。数馬上まで車で入る。小雨で雨具つけ灯具頼りに２４時に出発する。鞘口峠から稜線へ。暗い樹間から星空がのぞき歓声。三頭山東峰、西峰と過ぎる。槇寄山が近ずく頃は、周囲も白んで道が見えてきた。土俵岳で朝食となる。材料持ち合い豚汁をつくる。

生藤山までくると登山者で賑やか。陣馬山で遅い昼食。風が肌に冷たかった。陣馬をこえると目標はぐんと近ずいた。景信山、城山と過ぎる。木々の芽吹きが美しく、桜も今が満開。めざす高尾山頂だ。『やったぞ三頭山－高尾山縦走』の横断幕で記念写真。嬉しさをかみしめていた。　（H４年４月歩く）

岩木山－岩手山

６月２７～３０日、単独で東北の山旅へ。２７日、夜行バスで弘前に着く。岩木山へは嶽温泉から登る。はじめ登山道を外れあせる。岩木山頂に立った。日本海が見えた、遠く津軽まで来たかと感慨。その日は酸ケ湯に一泊。翌日は早朝に宿を出発する。お花畑の広がる仙人岱湿原から、思わぬ雪渓歩きも。八甲田大岳に着く。山頂にはテント泊の先客。残雪の八甲田の山々の展望台だ。青森から盛岡へ列車で移動。その日は市内に泊まる。

２９日は朝のバスを利用し、残雪深い八幡平頂上へ。当初の予定、茶臼口から松川温泉までバス移動を変更、裏岩手縦走に切り替える。嶮岨森で遅い昼食。途中で雪渓を何度かこえる。山中の沼にミズバショウが満開だった。松川温泉には４時頃着きホッとする。

夜明け、露天風呂に浴し４時に出発。岩手山への裏コース、道は良かった。鬼ケ城尾根は北側は絶壁となっている。キレット連続でさすが。砂礫の道を登り９時山頂に着く。頂上で朝から初めて人に会った。　（Ｈ４年６月歩く）

北アルプス裏銀座

８月１～３日、山友５人で北アルプス裏銀座を歩く。早朝、富山で「有峰まつり」のウチワを貰って便利。初日は薬師岳へ登って太郎平小屋泊まり。翌日は黒部川を越え雲ノ平へ。昼食は清流で、ソーメン作って涼味満点。水晶小屋に着いた。日も傾いた水晶岳に登り満足。翌日は６時に出発する。新穂高温泉まで下り帰宅のプランは新幹線並み。ワリモ岳から見た鷲羽岳はすごい迫力。

鷲羽岳に登頂。展望は抜群、槍ケ岳が間近い。眼下の三俣山荘まで快適にくだる。更に進み、双六小屋の前で昼食となる。いよいよ鏡平小屋をへて、新穂高温泉へ。稜線を歩いていると突如、私たちの前に可愛い雷鳥のひなが６羽、道をふさぐ。気づくともっとそば左に親鳥もいた。きれいな色だった。予期せぬ幸運に私たちは声もなく、立ちつくしていた。　（Ｈ４年８月歩く）

☆　山の頂にも、親亀の上に子亀が乗る。
中央アルプス仙涯嶺（2734㍍）付近で。
後方は越百山（2613㍍）
（Ｈ５，10，５．会員・相川平司氏　撮影）

初心者登山教室の想い出

小池廣治

山に関する資料の中に、昭和50年６月、小生が初心者登山教室の課程を終了したことを証する、武蔵野市教育委員会の証書があり、大事に保存してあります。その頃、武蔵野市緑町の社宅に住んでいましたが、近くに市立図書館があり、歴史小説などを借り受けて、出張先の宿舎でよく読んだものです。偶々３月頃に史談会の催しがあり、忍城跡や、さきたま古墳群を市のバスで見学した際、登山教室の募集のことを知り、申し込みをしたところ、第２回市民初心者登山教室に入会出来ました。（井の頭支部には同窓生が何人か居ると思います）

今から考えると贅沢な話ですが、井の頭公会堂での、山の気象、装備、読地図などの講義や、モミソ沢の沢登り、本栖湖のキャンプ実習等、市財政の富裕の恩恵にたっぷり浴したものです。テント実習のとき主催者側の指名で、年長の私がグループの世話人になりましたが、教室が終了した後も、何回か山登りを続けているうちに、交際が深まり、今でも賀状の交換を欠かしたことがありません。エイボンレディだったせいか如才なく社交性豊かなＫ夫人、地元の素封家のお嬢さんで、可細いからだながら長丁場に強かったＨさんは、今は３人の子の母。神奈川相互銀行の重役の娘さんで、バイオリニストのＫさんは、山男と結婚して、新婚旅行はキリマンジャロ。今は中学生の一人息子と、夏休みは北アルプスを縦走しています。国鉄職員のＡさんは、力もある上に、実に器用で、グループの事務長格、チロルハットがよく似合う人でした。

唯一の独身男性のＮ君は、山梨大を出たばかりで、教員試験の準備中でしたが、我々を思い出の甲府に連れて行ってくれたものです。ところが、惜しいことに、教師になった１年位あとにバイクの事故で、若い命を失ってしまいましたが、お通夜の席で、愛煙家だったＮ君の霊前で、同じ愛煙家仲間のＡさんが、一服すった煙草を線香代わりに供えたことが、未だに忘れられない光景であります。煙草を喫わない私ですが、喫煙には全く違和感を持っていないのは、そのせいかも知れません。Ｎ君のお母さんから、「今年から山に登れなくなりました」と、お便りがありましたが、一人息子のあとを継ぐように、山歩きを楽しんでいたお母さんには、残念なことでしょう。

私も昨年、朝日連峰縦走に出かけ、風雨の中、Ｓリーダーの伴走と励ましのお陰で、大朝日岳を越えることが出来ましたが、シュラフを担いでの縦走は、これが最後かと思うと、一抹の寂しさを覚え、Ｎ君のお母さんの心境に同感することひとしおのものがあります。

ジョギングに魅せられて

岡野　達

平成８年４月７日(日)、私は埼玉県吉川市で開催された、吉川ロードレース大会のハーフマラソンの部（20,095m)に参加していた。それまでは順調に走っていたが、16kmを経過した辺りで、右脚の太もも前面の筋肉が痛くなってきた。左脚に重心を乗せてだましだまし走ったが、スピードはダウンし、今までに追い越してきた後続のランナー達に、次々に追い抜かれてしまった。20kmを過ぎ、Finsh の横断幕が見えてきたが、歩幅30cm刻みにダウンし、最後の長い長い１kmになってしまった。最後の気力を振り絞って、やっとゴールインをした。タイムは１時間56分41秒で、男子40才代の部 495人中、425 位であった。

吉川市は、越谷市と千葉県野田市に挟まれた市で、４月１日に新たに町から市になったばかりである。とりたてて有名なものはないが、ＪＲ武蔵野線「吉川駅」南ロータリーに巨大な黄金の“なまず”のモニュメントがあるように、市の名物は、なまずらしい。吉川付近を散策し、なまず料理を食するという山行計画はどうだろうかと思った。

私がジョキングを始め、マラソン大会に参加するようになったのは、次の理由からである。現在、私には中学生と高校生の息子がおり、教育費その他で、一番お金のかかる時期である。おまけに、バブルが弾け、給料は上がらないので、小遣いは大幅に減額されるはめになった。その結果、支部の山行にもあまり行けなくなってしまった。

あまりお金のかからないスポーツはないだろうかと、常日頃思っていたところ、平成７年10月のとある日に、旭スポーツセンターで、もっと楽しくなる「ジョギング講座」という、パンフレットが目に止まった。会場が横浜市こども自然公園と、市立万騎が原小学校で、受講料が1100円と安かったので、受講することに決めた。11月12日に受講者40名が出席し、群馬大教授・山西哲郎先生の講義と、ランニング指導が行われた。ランニングはカウンセリングである。「ゆっくり」は新時代の走り方である。誰でもゆっくり走る権利があると説く、山西先生の走る世界に触れ、自分自身の走る世界を見つけようと思った。

翌週の日曜日に、家の近くの短大グランドで２km位走ってみた。走り終えて少し脚が痛くなり、翌日から３日間筋肉痛が続いた。以後、週１回走り続け、走るごとに距離も伸び、５ヶ月でどうにか25km位は走れるようになった。そして、マラソン大会にも参加するようになった。本来なら、毎日走るべきであるが、家人からジョギングは危険だ、すぐ大会に出るのは無謀だと、非難されながら走っているので、週１回がやっとなのである。

この年になるまで、長距離など走ったことがなく、街で見かけるジョーカーを、変人・奇人、別世界の人間のように思っていた。それなのに、自分でも信じられない程、ジョギングの虜になってしまった。ジョギングは、心臓への負担をかけないで走るこ

とであり、脚が痛くならなければ、いつまでも走ることが出来る。むしろハイキングの方が、心臓や脚への負担が大になる時がある。

あまりお金のかからないスポーツだと思っていたジョギングであったが、シューズ、ウェアの購入代、大会参加費、交通費等の諸経費が必要で、ますます支部山行に参加できなくなってしまった。これからは、ハイキングとジョギングを両立させることで、いつまでも健脚でありたいと思っている。

槍ヶ岳雑感

広島律子

昔、もう五十数年前の子供の頃の話。雪橇り遊びは郷土館前の坂道が格好の場所であった。その売店に絵葉書と共に、駒草等の高山植物の栞が沢山並べてあった。「どこに咲いているの？」と係の人に尋ねて、「遠い高いお山よ」と教えてもらった。幼い頭に蓮華や菜の花畑を描き、お山の美しさに憧れた。

柳が芽を吹く頃、中学校の先生の若奥さんが、綺麗にお化粧して街を春風にたゆとう姿は、子供心にも怪しげだった。ご主人が生徒を引率登山中遭難、その心労から精神の均衡を崩された由。山は怖い処と恐れた。

山国でも真夏の日中は暑い。真っ黒に日焼けし、煤けた飯盒を幅広のカーキー色のリュックサックにぶら下げ、腰には汗滲みた手拭、朴の下駄履きのお兄さん達をよく見かけた。祭や縁日によく見かける物乞いの人とその姿は同類項に写り、山はお風呂の嫌いな人だけ行くのかなと疑った。

学校近くの紅葉に染まる城山から、冠雪の北アルプスの威容が一望出来た。稲刈りを終えた田ん圃の向こうに連なる山脈、青く高く澄んだ秋空の下、美しい風景に皆で槍の山容を確認しあい、大きな声で「ヤッホー」と叫んだ。

それからは、戦争・敗戦・結婚・育児と教育・マイホーム造りと、山とは全く無縁の暮らし。初老の域に入り、槍の穂先に立ち飛騨側を振り返った時、そこには小学生の私が佇んでいた。心の一隅にあった記憶が瞬時に蘇り、両親・先生・友人・家族・そしてあの若奥さんの、紅の艶やかさまで思い出されて、涙が溢れた。

頂上から故郷を望める幸せに、目頭をおさえ素直に深く一礼した。六人の道連れは、既に半数は引退、鬼籍に入られた方、病重篤な方、細々と続けているのは私一人のみ。十年一昔、時の重さを身に滲みて感ずる。槍ヶ岳は私にとって忘れる事の出来ない、実に比重の大きい大切な山である。

幻の戸隠山行

頼角幸子

若い頃、お嫁に行くときは、綿帽子に白無垢の花嫁衣装を着て、戸隠神社で式を上げたいと夢見ていた。その憧れの戸隠へ、昨年の11月25日（土）上野発７時の『あさま１号』で出発した。

「昨日、戸隠で遭難があったんで、頼さんから断って来るんじゃないかと思ったョ」と車内でリーダーから聞かされ、それでなくとも、剣の刃渡りやら、蟻の戸渡り、八方睨みと、恐ろしそうな名前の場所ばかりで、不安がっている私を見て、雪の様子では、高妻山に変更するョと言ってくれて、内心ホッとする。

２年後の冬季オリンピックを控え、準備に忙しい長野駅に９時51分到着、この時期、バスは中社までしか入らないため、タクシーを利用する。途中、雪のため坂が登れず押したり、工事中のトラックに引っ張ってもらったりして、戸隠キャンプ場入口でタクシーを降りる。青空に鋭く尖った戸隠の白い峰々が、目に飛び込んできた。

私達の行くコースは通常の逆で、一不動避難小屋を経て戸隠山に登るコースである。今日の行程は一不動避難小屋までで、夏道だと２時間少しの所だが、予想以上の積雪で深いところは１ｍ位もあり、トップのリーダーはラッセルが大変だ。途中、野生の猿が枝から枝へと元気に飛び回っている姿に、しばし疲れも忘れる。

氷清水のクサリ場を過ぎ、稜線までもう少しの所で、腰までの深い雪に思うように進まず、とうとう暗くなってしまった。これではビバークかなと心配したが、18時37分やっとのことで一不動小屋に着く。

冬期の避難小屋は初めての経験で、あまりの寒さに震えてしまう。内から暖めようとキムチ鍋を食べ、ウイスキーを飲んでみたが、さっぱり暖かくならない。もう寝るしかないと、入口の戸の隙間を新聞紙で埋めて、早々にシュラフに潜り込んだ。羽毛のジャンパーを着込んで寝たせいか、随分とシュラフが窮屈。寒いきつい、寒いきついと唱えながら、まんじりともせずに朝を迎える。どうやら昨夜はシュラフを上下反対に入った様だ、道理できつかったはずだ。寒さで頭までかじかんでしまったのかしら……。

11月26日（日）、昨日と同様、今日も快晴だ。予定では戸隠本山に行くはずだったが、予想外の雪の多さと、私の疲労度を考えてくれて、下山する事になる。

朝日に輝く高妻山をバックに記念写真を撮り、昨日のラッセルした道を一路下山。蟻の戸渡りで遭難した親子は、まだ発見されてない様子で、昨日に続き今日も２機のヘリコプターが旋回している。早く見つかることを願いキャンプ場への道を急ぐ。

戸隠中社に参詣、無事下山を祝して、山門前のおそば屋さんで岩魚を肴に、ニゴリ酒で乾杯、長野行のバスに乗る。

北アルプスへの想い

浦　田　節　子

朝もやと雨のそぼふる中房温泉に深夜バスで到着した。長い間憧れていた北アルプスの玄関に。冬の遭難さわぎを耳にする度に私には無理な山かなと思いつつも、どうしても登ってみたいの一念でＴさんのお誘いでやってきた。傘をさし、朝食をとり、雨具をつけ登り始めた。ガイドブックで三大急登との事で覚悟はしていた。樹林帯を一歩一歩踏みしめ、丹沢大山の何倍かなと思いつつ合戦小屋に着いた時は、雨もやみ、スイカをほおばる人々でいっぱいだった。

燕山荘までもう一登り、イワカガミ、ヨツバシオガマ、シナノキンバイの花々に励まされ燕山荘に到着、さすがに２５００ｍを越えるころより肌にひんやりと冷気が漂ってきた。燕山荘に荷物を置き、燕岳へ向かう。白い花崗岩が林立する中、岩かげにひっそりとコマクサがゆれていた。

私はついに北アルプスへ来たのだ。”バンザーイ”・・・Ｔさんありがとう！！

北アルプスへの想いは九州鹿児島で高校生活を送って以来の事である。家庭科のＨ先生の東京での研修後、北アルプスをガイドと一緒に縦走し、白骨温泉で一浴して帰ってきたとの夏休み明けの授業中に話された事、白骨温泉の奇妙な名前とともに、北アルプスの情景がインプットされた。その後、大阪－横浜－札幌－横浜と住居を替え、子育てでいつしか忘れてしまっていた。子供の成長で自分の時間をもてるようになり、再び山への憧れがもちあがってきた。

新ハイに入り４年目、念願の北アルプスにほんの一部ではあるが、足を踏みいれる事ができた。

翌日早朝、もやの中、表銀座と呼ばれる縦走路を、大天井岳へ向かう。日の昇るに従って、もやも晴れ、澄んだ空気、青い空、槍ヶ岳を間近に見、足元にはコマクサ、雪渓で遊び、大天井岳では、遥かに遠くきらきら光る日本海を望むことができた。一日中槍を右手に時には雷鳥の親子に出会い、名も知らぬ色とりどりの草花を見ながら常念小屋に着いた。心うきうき、俗事をすべて忘れ、最高の気分で、その楽しかった情景が翌年の入院というつらい苦しい時も、私の心を満たし続け生きる力となったような気がする。

私にはもう一つまだ果たしていない事、それは白骨温泉で一浴する事、これは年老いてもできるかな、でもどこかの山から下山して入浴できたらもっと良いなと思っています。

わたしの横浜

永井和男

よく東京人には故郷がないと言われる。大都会で、借家住まいがほとんどで、定着性がなく、更に震災や戦災で家が焼かれて四散して、どうせ借家だからもとの跡地に戻ってきて、家を建てることも出来ない。しかし、だから東京人には故郷がないなどと、一概に言えるだろうか。何代も続いている商家の跡取りなんかは何人もいる。もっとも、両親の系統とも三代以上東京生れの、生粋の江戸っ子は、1千万都民のうち30万人ぐらいと言われている。この比率は、横浜でも変わらないとすれば、我が横浜支部には、72名の3％で両親系三代以上横浜生まれが、2人居ることになるのだが、1人も居ないようだ。

江戸時代にすでに 200万の世界一の人口の東京と、138 年前の開港時に「とまやの煙ちらりほらりと立てりしところ」（横浜市歌）の横浜とは、比較は無理かもしれない。因みに私自身について言えば、横浜市に終の棲み家を得て15年目になるが、父系の寺は芝高輪の元禄の頃からの光福寺、母系の寺は三代将軍家光から、鐘の寄進を受けたと言う浅草の源空寺で、両方とも墓石には、安政だの嘉永だのと刻んであった。ということは、江戸町人で苗字がなく屋号の墓で、しかも墓が三つもあり、誰が先祖なのかよく分からないので、もう整理して父親の代で、新しい墓に作り替えたからである。ついでながら、ほとんどの墓に幕末より以前の年号が少ないのは、墓は4代目でほぼ無縁仏になり、寺が整理処分してしまうからである。無縁塚には元禄や宝永といったものが、束ねられている。高いお金を出して立派な墓を作っても、百年4代目で無縁塚に整理統合ならば、墓など作って狭い国土を破壊するより「マディソン郡の橋」の上から、粉にしてコツを撒いてしまった方が良いと思う。三代以上という江戸っ子の定義からすれば、私は生粋の江戸っ子であるが、家内が京都系だから江戸っ子も私の代でおしまい。誰が決めたか知らないが、江戸っ子は三代以上だが、横浜では三日住めばハマッコだと言う。つまり三代ぐらい続かないと、江戸以来の独特のしきたりや、年中行事や江戸方言が身についていないと言う意味で、かたや三日住んだらハマッコとは、開港以来の国際都市で、過去にとらわれず新しいものは何でも取り入れる、よそ者を田舎っぺいなどと蔑むような、排他性がない気性を表しているのだと思う。

さて、故郷とは何だろうか。ふるさとは遠きにありて思うもの／よしやうらぶれて異土の乞食（かたい）となるとても／帰るところあるまじき・・・（室生犀星）、人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香に匂いける（紀貫之）、幾年ふるさと／来て見れば・・・・なれにし昔に／変わらねど／あれたる我家に／住む人絶えてなく（犬童球渓・ヘイス曲）、等々と古来歌や詩に枚挙の暇がない。しかし「小鮒釣りしかの川」とか「つくし摘みし岡辺よ、社の森よ」のように、幼少年期、少なくとも物心ついてから、青年期ぐらいまで連綿とした思い出が、その土地の隅々に染みついていないと、いく

ら長く住みついていても「ふるさと」ではないようだ。私にとって、どこどこは第二の故郷ですというような場合は別にして。

私が港南区に終の棲み家を得て１５年目と言うことは、現在還暦の我が生涯で、横浜がもっとも長い定住の地になってしまった。それまで麻布に10年（戦災）、池袋に14年、練馬に10年、清瀬市に３年、世田谷深沢に10年であったからだ。しかし横浜市内どこを歩いても、引っ越し以前の思い出はほとんどない。私だけでなく、新興都市に住む者にとっては当然のことで、ことさら強調することでもない。横浜市も急激に膨脹したので、ほとんどの部分が新興都市である。私の家の場所の旧名は、武州久良岐郡横浜村ではなく、相州鎌倉郡永野村である。つまり境木、六ツ川、大岡、長野山（円海山）と続く相武国境より相模湾寄りである。以前勤めていた会社で流行った、横浜から通う社員を揶揄する言葉にこんなのがある。「横浜に住んでいると言えるのは、窓を開ければ港が見えるところに住んでなきゃダメよ。おめえらが住んでいるところは、ヨコハマでなくて、ヨコヤマよ」。新ハイキング40周年記念特集号に、古いハイキングコースの紹介があったが、小机城址の辺に横山と言うのが本当にあったので、思わず笑ってしまった。

見知らぬ土地を歩くのはエトランゼとしては、大いに好奇心を満たしてくれて楽しいが、毎日の散歩のように度重なればつまらない。好奇心が強いほど新天地を求めて新しい流浪のの旅に出たくなってしまう。ところが長い間にさまざまな思い出が染みついている場所なら、何度そこを通りかかろうと、その都度新鮮に思い出がよみがえる。かっての卒業式の答辞の決まり文句「かずかずの思い出が走馬燈のごとく」である。いま、イセブラをしてもオデオン座も、日活も、賑座も、赤灯台白灯台も知らない。なんだか寂しいのである。そこで私のごく少ない横浜の思い出や、経験を以下に列挙して、これにまつわる人様の思い出ばなしをして頂き、自分なりのバーチャルリアリティー（仮想現実）をこしらえて楽んで見たいものである。

叔父が日立に勤めていたので、戦前戦中に戸塚に何回か来た。

大坂下の日立工場の西側（国道寄り）には大きな沼があって、ザリガニが大量に釣れた。還暦の今日まであれほどの棲息場所を見たことがない。昭和５年に大船（岩瀬）の農事試験場から、20匹逃げたのが嚆矢（こうし）だというからさもありなん。父は同じ沼で大きな鮒を沢山釣った。近くの柏尾川に堰があり、水遊びをした。周囲は田んぼで、夜は誘蛾灯が多く、下の水槽に落ちたカブト虫やクワガタを捕った。日立戸塚病院は、青年学校であったが、後に陸軍が駐屯していた。

南京町（中華街）に円タク（タクシー）でチャン料理（差別用語、中華料理のこと）を食べにいった。ステンドグラスが多い個室で、にんじんが入ったような、白いスープが出た。我々子供たちは、まずいまずいと顔をしかめた。

夏の午後、船で防波堤に渡り、提灯網に大きな魚の頭を入れ、ロープで垂らしてワ

を見なかった。あれは何処の防波堤なのか。赤灯台だったのだろうか。（以上昭和15年頃）

父の会社の同僚が間門に住んでいて、よく遊びにいった。横浜駅から市電で桜木町を通り、麦田のトンネルをぬけて、終点が間門。都電がトンネルを通らないから、東京っ子には印象的なのである。不動尊の階段の途中に、べんけい蟹がたくさんいた。滝は水量がかなり豊富だった。今は水はほとんど無いが（よこはまウオーキングで確認）。間門海岸で海藻の中から、ワタリガニやイシガニを捕った。アサリ、ハマグリはたくさん捕れたが、養殖場であった。監視人は我々子供には寛大であった。

遠浅の海岸の上を、頭上をかすめるように、飛行艇が根岸の方から飛来する。離着水を繰り返している。後に知ったのだが、あれは弐式大艇であり、現在、東京の船の科学館に現物が展示してある。戦後、米軍が実機を調査したところ、第二次世界大戦中、世界最優秀の飛行艇とわかり、米国ノーフォーク海軍基地に保存してあったものを例の「火の用心のオジサン」笹川良一氏が交渉して、日本に返還されたものである。戦時中米軍はこれをＥＩＭＬＹ（エミリー）の愛称で呼んだそうだ。（横浜ウオーキングで富岡総合運動公園に行ったら、海軍横浜航空隊の碑があり、24機あったと書いてあった。（以上、昭和17～19年頃）

戦争が終わって再び間門へ行った。瓦礫の横浜の街、鉄条網を張りめぐらせた、米軍基地の横浜であった。間門の海岸は、おびただしいカーキ色の缶詰の空き缶が打ち寄せていた。沖に停泊する米艦船の海上投棄であろう。廃船の影には戦災孤児がたむろしていた。それでも遠浅の海岸は海の幸が豊富であった。ワタリガニ、イシガニ、ハゼ、ニシ（貝）アサリ、ハマグリと戦後の食料難の空腹を満たしてくれた。

電車が東神奈川の辺りを通る時、一望千里夕日の沈む果てまで（小学４年生の目に実際そのように見えたのだ）米軍のトラックとジープが置いてあった。こんなアメリカと戦った日本人は大馬鹿者であり、日本人に生まれたことを恥に思った。

中学２年の春、昭和24年に、日本貿易博覧会が横浜で開かれた。反町会場と野毛山会場であった。その跡地が今のアイススケート場と、動物園である。学校から見に来たついでに、船で横浜港めぐりをした。山下公園は米軍に接収されているので、弁天橋のたもとから、牡蠣殻のついたオンボロ木造船で回った。「向こうに見える３本マストの船は、先日「黄変米」（カビの生えた米）を運んできた有馬山丸でございまーす」を憶えている。野毛会場の目玉はテレビジヨン（テレビジョンと言うなかれ）、本邦初公開で一目見たさの群衆が十重二十重ととぐろを巻いて並んでいた。帰り道、成田山不動尊別院前の芝生の土手から眼下に見たのは、戦闘機が離着陸する滑走路であった。世に、かってザキの野沢屋裏に飛行場があったと語りつがれている。いま博雅の焼売が食べられないのと、国際酒場根岸屋で飲めないのが残念である。（おわり）

限りないロマンを求めて

古谷　芳子

新ハイキングに定かではないが、昭和５２年くらいに入会、気が付いてみると２０年の歳月が経っていた。　当時は本部山行と個人山行がほとんどで、横浜支部に所属したのは２年くらい後のことで、支部入会後は細々ながら身を置く程度で訳ありの個人山行に専念していた。

山は１０代よりはじめ、山岳部に入部ただ我武者羅に登っていたような気がする。しかし１５歳の頃に縦走した三峰口から雲取山に１泊、あの長い石尾根を氷川に下った。このことが私の山に曳かれた理由である。
そして今なお困難に遭遇した数々の山はいとおしく記憶に残っている。

２０代は学生の身と新劇に打ち込み、その間で余裕のないままそれでも僅かな時間を惜しみながら山に登った。最近では香港駐在の際に香港ハイキングクラブに所属、週二度くらいの山行を楽しんでいた。今でも行ったり来たりの生活であるが、その都度香港の山を楽しんでいる。

香港の山は低山であるが、それなりに高度感もあり変化に富んでいて実に面白く充分満足出来た。
このように山は私の活動力であり偉大なる先駆者でもある。したがってこれからは老いに向かってまっしぐらであるが、それなりに山へのあこがれとロマンを追いかけながら中高年らしい無理のない山行を楽しんでゆきたい所存である。

香港の山々を詠む

岩稜の獅子山をひたぶるに霧こむ頂に汗滂沱たり

天霧う森林限界越え行けば大帽山より筌湾を見放く

シャープピーク
嶮し山蚺蛇尖の頂に佇ち槍ケ岳思う日本人吾れ

きりぎしの嶮しかりけり屏風山霞を曳きて眼前にたつ

稜線の渓より雨の吹きあぐる大金鐘は幻影にあらず

山つつじ、シャリンバイの咲き競い八仙嶺の縦走誘のう

緊迫感の犇々伝い来国境の紅花嶺を足速に行く

霧こむる馬鞍山よりたまゆらに西貢の街鮮やけく見ゆ

靉靆と烟れる雨に鳳凰山の仏像いまだ現れ出でん

汗しつつ菱角山頂極むれば南支那海燦爛とせり

山・新ハイとの出会い

熊谷松治

私の「新ハイ」との出会いは、ヨコハマとの出会いに始まる。昭和35年(1960)10月、家族を福島に残して、私だけ新しい任地横浜に向かった。その頃はまだ単身赴任などという言葉はなかった。

戦後の復興に大きな役割を果たした石炭産業も、安い石油に押されて斜陽産業となり、会社主導の転職の話が持ち上がって、私も長年勤めた炭鉱に見切りをつけて、前途に不安を抱きながらも、新しい職場への転身を決意したのだった。幼い二児を抱え三人目を身籠っていた妻は、未知の職場へ向かう亭主をどんな気持ちで見送ったのであろうか。新しい職場は、新山下町の貯木場の近くにあった。工場の外の道路にまで、これから加工する大型トラックのシャーシーが置かれていた。

入社して何年目かに、労組の役員に推され、青対活動の一つとしてハイキングが企画されて、６月某日、夜行日帰りで「大菩薩峠」に行くことになり、つきあいに私も行く羽目になった。事務の若い娘などもまじって、10数名のメンバーであった。新宿発24時近い夜行列車に２時間も前から並んで、やっと座れたが眠ることは出来なかった。

未明の暗い塩山駅前のバス乗り場は、始発のバスを待つハイカーの群がうごめいていた。裂石でバスを降りると生憎の雨で、雨具をつけての出発となった。長兵衛山荘で雨宿りをすることになり、２時間ぐらい過ごしたろうか。その間に菓子や果物など持っていったものを出しあって、楽しいおしゃべりで時を過ごした。私は何も知らないので、おにぎりと水筒しか持ってゆかなかったので、恥ずかしい思いもしたが、そのうち雨も上がってきたので、峠まで行くことになった。峠の介山荘で昼食となり暖かいソバなどもあって、人心地がついた思いだった。前半は雨に祟られたが、自然の景観はもとより、仕事から解放されての仲間との語らいなど、初めてハイキングの楽しさを体験させてもらったのだった。

その後は、年に１～２回休日に子供達を連れて、奥多摩や箱根あたりの初心者向きのコースを歩いていた。その頃ふと本屋で見かけたのが「新ハイ」で、会員になったのは、又、数年後のことであった。支部に入会したのは、昭和48年２月で、支部山行初参加は翌年６月、「雄国沼・猫魔ヶ岳」（夜行日帰り）、係は当時支部長の山田進氏。参加者は、善波英雄、中野善雄、朝倉修三、山本彰、吉岡節子、宮代信子、熊谷節子（私の娘）と私の９名であった。あれから23年！、このメンバーでいま支部に在席しているのは、山田さんと私の２人だけである。

みちのくの山　―― とりとめのない話 ――

沢　野　正　明

☆季節

冬を除いて誰でも登山できる季節のなかで、梅雨時は登山人口が比較的少なくなる頃である。しかし、東北の日本海側の山々は６月下旬～７月上旬にかけ、比較的好天の確率が高い。太平洋側の岩手、宮城県が北東から吹く風（やませ）の影響で、冷たい梅雨があるのに対し。日本海側は、やませが奥羽山脈で遮られることで、好天に恵まれる原因であることがわかる。しかも、この時期登山者が特に少なく、好天に出会えば花々はきれいだし、美しい山を一人占めできること請け合いであり、この時期をお勧めしたい。

残雪期では、日本海側は残雪が遅くまであり、悪天では慎重な行動と装備が要求される。

紅葉も９月から始まり、10月中が最も美しい山が楽しめる。東北の山は標高こそ高くはないが、山頂付近は灌木も背が低く、色とりどりのジュータンを敷いたような、見事な紅葉が見られる。紅葉は下へ降りてきて、ブナ、ミズナラ、トチ等の黄葉となる。

☆花

高山植物は雪解けを待って咲き始め、それぞれの時期に従って種々の花が次々と咲き、見事な群落も見られる。鳥海山に８月下旬に行った時、チングルマが咲いていたので驚いたことがある。種類も多く、花の名を覚えるのは大変である。

☆温泉

東北の山でもっとも嬉しいことは、温泉で汗を流せることである。この地方は有数の温泉地帯であるので、それぞれの山行で温泉で泊まることを計画すれば、疲労の回復に役立つし、楽しみでもある。

以前は安くて素朴な温泉が多かったが、近頃の秘湯ブームで、山屋も素朴さにひたれなくなってきたのは、誠に残念である。だが、まだまだ素朴な雰囲気のある温泉も多くあり、今後もずっとそのままでいてもらいたいと思うのは、勝手な言い分かも知れない。しかし、東北の山でも、温泉に恵まれない所もある。船形連峰の宮城県側、早池峰がそうであると思う。船形連峰は古い火山であるが、下山してすぐというと、定義温泉しかなく、我々山屋が泊まれるような、一般的なものではないようで、温泉は無いといっても良い。早池峰も花巻まで出なければ温泉は無いが、近頃各地で温泉を掘り当てているので、期待することにしょう。

☆交通

アプローチの長い東北の山は、有名な山を除いて現在では、路線バスは廃止され、或いは極端に縮小されていて、誠に不便になってしまった。しかも、生半可な距離ではない山行では、小人数だとそれだけ費用も増すので、安くあげるには、それに見合う人数を誘って行くことになり、レンタカーを利用するのも良い方法である。

その他、地形的では、火山特有の雄大で荒涼とした山があるかと思えば、地塘が点在し、湿原を持つ山も多いし、いつまでも雪渓の残る山もある。林相も美しく、アオモリトドマツ等の針葉樹林、ブナを主体とする原生林等、魅力は尽きない。おわり

娘へのメッセージ

服　部　八重子

“にこにこしにゆく”私の会員ナンバーです。山行が決まると、潤滑油が全身をかけめぐり、汽笛を上から下から鳴らしながら、鼻息荒く、全力疾走し始めます。当然口元をほころばせながら、夫へのサービスも、抜かりがありません。

川のせせらぎと共に登った常念岳、燃える紅葉の中で、ブルーの瞳の五色沼。霧の中でピンクの花束を、そっと咲かせていた伊豆の石楠花など、一片のシーンが、瞼に残り、心を限りなく豊にしてくれます。どうしてこんなに森や山がいいのかなぁー。土のぬくもりが心を優しく幸せにしてくれるからか、風に身を委ねるからか、小鳥が自由に語りかけてくれるから、仲間が楽しいから、もう恋こがれてどうにも止まりません。

その想いが、いたずら雲の様にポッカリと現れました。親思いの娘でもありますが、森山さんとの結婚が、今進行中です。私の愛する森と山を奪ってどうする！、娘よ！嵐がきたら歯をくいしばって生きてね。暖かい太陽の光が、燦然と輝く日がきっときます。貴女は光の子だから…。大いなる自然に抱かれて、花を愛し、夏に跳ね、落ち葉に愁い、冬は春の芽吹きの日の為に、心を豊にして下さい。森の木々が増えたら、みんなで山へ行こう！。

幸せを　願って見上げる　軒つばめ

カット・岡野　達　氏

テクテク… テクテク…

鎌田善子

６月２日、軽井沢の峰の茶屋から、浅間山に登った。ピーカンの暑い一日だった。樹林帯を抜けてからの暑かったこと。ザラザラの砂道を百歩登って呼吸を整え、百歩登ってはと、やっと頂上に登りついた。一緒に行った若い人達も、同じ思いで登ったという。苦しかったがすばらしかった。次の週は仏果山に行く約束が出来た。そして次の週は、桧洞丸にバイケイ草を見に行くことになった。登る時には苦しくて、もうこれで終りにしよう等と思いつつ、花や景色に慰められ、苦しさを忘れて若い人達の後ろからついて登ってしまう。靴も痛んできたし、体調も限界に来たようだから、きりもいいし、山に行くのは止めようと思ったが、まだ大丈夫だから、靴を買って下さいと言ってくれる人達に慰められて、靴を買う気になった。そして、７月６日～７日、苗場山に登った。３度目である。湯沢の駅では小雨が舞っていた。梅雨の最中だから仕方がないと思いながら、和田小舎まで車で入った。雨は止み、明るくなった。平年より気温は低く、汗かきの私にはとても助かった登山日和で、気持ち良く歩けた。下の芝、中の芝、上の芝、神楽峰と、懐かしさをかみしめながら歩いた。雷清水の美味しかったこと、お花が一ぱい咲いていて、苦しさを忘れさせてくれたこと、光ゴケが昔と同じ様に、ほのかな蛍光を放っていたこと。急登を登り終えると池塘があるべき処は、一面の雪渓で夏山に来たという感じ。夕陽が、落日がすばらしかった。小屋の主人も久し振りに美しい夕陽だったと言われた。帰りは赤湯に下った。頂上直下は雪渓で道がなく、笹の中をしばらくヤブこぎをする。シラネアオイの群生地を見る。矢車草、ツバメオモト、イワカガミ、ショウジョウバカマ、夏山の高山植物が一ぱいだった。赤湯で一浴し、又一登りである。予定より早く湯沢の駅に着く。トンネルを抜けると高崎は強い雨でした。昔の山をアンコールするのも、良いものである。

大きな山を抱えている県では、山開きと共に遭難救助訓練が行われている。ニュースでは、思いがけないところで、遭難が報じられている。中高年の登山者が多い。昔山登りをしたと言う人がタイムスリップして、気持ちの上で登れると思い込み、無理をしてしいることが多い様だ。振り返って見ると、去年も今年も良く歩いたものだと思いながら、みんなの後をついてやっと歩いている。無理をしないようにと思いながら、若い人達の後をついて行くのには、やっぱり無理をしているのではないだろうか。若い人達も「私達もやっぱり苦しいですよ」と言って慰めてくれるが、テクテク、テクテクとアルツハイマーになっても、パーキンソンになっても、風が吹いても雨が降っても、テクテク、テクテク出歩く習性は、なおらないのだろうか。

２０代の頃、夫の勤務先延岡に居た頃は、九州の山々、宮の浦岳まで登った。大阪転勤の８年間は関西の山々を、名古屋の３年間は鈴鹿の山々を、親や知人に子供を預

かってもらい、テクテクと歩いたものだ。昔の仲間は今はもうアキレス腱を痛めたとか、糖尿病だとか言って歩かなくなった。筑波で教授をしている友人が、学生を連れて歩く時に、声をかけてくれる。山梨の友人から、細々と声がかかるのがうれしい。ニトロンを首にぶらさげながら、膝サポーターを携帯しながら、飛び出して行く。どうか、温泉と地酒とチョッピリ登山の第２支部を早く発足して下さい。どうか支部の皆様、私を忘れないで、おいて行かないで下さい。頑張りますから。テクテク、テクテクと歩きますから。

風に吹かれて

佐野　淳一郎

峠を吹き抜ける風に吹かれて、雲の流れでも眺めていたい。こんなことを思うようになったのは、何時の頃からだろうか。

けわしい岩の山歩きに明け暮れた若い日々が終わって、しばらく経ってからのことらしい。その頃から一人歩きはプッツリと終わってしまった。そして降られれば降られたなりの、照れば照ったなりの歩き方も、いつの間にか身についてしまった。

山に入る前日まで、部屋の片隅に置かれたカートンの箱の中に、次々と備品が集められていくと日増しに緊張が高まっていく。いい山でありたい、という思いの中には山への怖れ、体調への不安、天候への不安など、自分にはどうにもならない感情が入り交じって体を包む。

旅にはこんな緊張はない。むしろ解放感がある。

旅先では友との語らいも、山の夜、ウイスキーでお腹をチカチカさせながら、饒舌になっているのもそれぞれに楽しい。しかし、緊張と不安の中でふと得られる、自分だけのわずかな時間がどうしてか好きだ。

久し振りに峠を渡るわずかな風に吹かれていると、おびただしいトンボの群れがカサカサと乾いた羽音をさせて耳もとをかすめて飛んでゆく。名も知らない小さな草花は鮮やかで美しい。下界の花と異なって、厳しい自然の環境に支配されながら、わずかな花のときを精一杯咲いているのだろう。

やがてコケモモの実が紅くなり、ナナカマドの葉が紅く燃えると、中腹から山麓にかけて冬はかけ足でやってくる。あらゆる色彩を消し、あらゆるものを凍えさせる冬の訪れを、いま小さな草花は息をこらして待っているのだった。色づき初めたコケモモの実を口に含むと、甘酸っぱい味がひろがっていった。それは山歩きに夢中になっていた遠い日のなつかしい味だった。

山の思い出あれこれ

石原　弘之

横浜支部に入って十数年。その間、参加した山行は多分 200回を越えているかも知れない。楽しかったり苦しかったり、その思い出は尽きることなく、今でも昨日のように覚えている。それらのうち、幾つかを、私なりに記してみたい。

★初めての山行は十二ヶ岳である

山が好きになるとか、嫌いになるかは、一番最初に登った山の印象によって決まることが非常に多い。苦しかったり、嫌なことがあったりすると、山が嫌いになり、登ることをやめてしまう。支部の場合も、初山行の印象を大事にしなければならないと思う。私の場合は「十二ヶ岳」で、参加人員は５名（当時は普通の参加人員）の車山行であった。幸にも天候に恵まれ、和気藹々のうちに山頂に着く。十二ヶ岳の頂上での昼食時に居た人が12名だった。又、下山して夕闇が迫って来た西湖からの富士山が、墨絵の様に見えて、実に美しかったことも忘れられない。そして、初山行からの皆さんの協力と、友情と言う仲間意識に助けられて、現在まで無事に山行を続けられてきている事は、本当に有り難いと思っている。

★初めての山行の係は扇山の「天ぷら山行」であった

個人山行で、よく天ぷらを揚げたりしていたので、初めての山行で天ぷら山行をと思い、計画をたてた。先輩各位の協力を得て、多少の戸惑いはあったものの、無事好評のうちに終わることが出来た。一人分の材料持参が、集めてみると食べ切れない程多かったり、その具の種類も実に多種多様であった。途中の沢でＫさんがとった沢ガニのから揚げなどは、絶品と言えよう。そして、４月下旬現在まで、天ぷら山行を続けているが、来年あたりから私の代わりに、係をどなたか引き受けてくれませんか、お願いします。

★一日で最も長く歩いたのは「小金沢連嶺」だった

山行計画では、柳沢峠から大菩薩嶺を経て、介山荘に泊まり、翌日、雁ヶ腹摺山－黒岳を経て湯の沢峠までである。ところが、湯の沢峠で昼食となったが、時間的にも早く、しかも全員元気そのもので、まだ歩き足りない様な顔をしている。急に予定を変更する事にして、大蔵高丸から滝子山まで足を延ばすことにした。さすがの健脚家も滝子山に着いた頃には、いささか疲れた様であったが、更に元気を出し一気に下って笹子駅に着く。駅前でビールを飲みながら「よく歩いたな…」という満足感があった。歩程約11時間位なので、今までの山行で、もっと長く歩いた事もあったかも知れないが、よく歩いたと言う実感からすると、最長なのかも知れない。

その反対に、短い山行もあった。家に帰ったのが２時頃、どこか体の具合が悪くて

早く帰ったのではないかと、逆に心配をかけた。多分、花咲山だったと思う。

★登った回数の一番多いのは「桧洞丸」だ

支部に入ってからいつとはなしに、西丹沢の山開きに係をする様になり、現在まで雨天中止以外、毎年実施している。日帰り山行を数年続けてから、ユーシンロッジ泊まり、同角山稜経由のコース。蛭ヶ岳泊まりの主稜縦走コース。又は山頂の青ヶ岳山荘泊まりなどである。

５月の最終日曜日の山開きは、白ヤシオをはじめ、その他のツツジのすばらしい開花を見ることができるはずだが、その年によって咲くのが早かったり、遅かったりして、必ずしも見られるとは限らない。見られなかった時は来年こそ、来年はと思って下山する。桧洞丸のヤシオは実にすばらしく、まだ見てない人は是非来年、一緒に登りませんか。

★一番参加人員の少ない山行、「大峰山・吾妻耶山」　係と二人で登る

例会で、係のＯさんからの山行説明に、手を挙げた人は私を含め、３～４人いたと思う。当日、上野駅のホームに行くと、係のＯさんが窓から顔を出して、手を振っている。車内に入ると、乗っているのはＯさん一人、他の人は、それぞれ都合が悪くて参加出来ず、Ｏさんと私の二人だけとの事だ、係と二人だけの山行である。Ｏさんは支部でも有名な健脚家で、しかも年も若い。上牧駅から歩き出してすぐ、二人の距離は開くばかりだが、姿が見えなくなる少し手前で待っていて、姿が見えると又歩き出す。頂上で一緒になり、その後は水上駅でビールを買って待っていた。

しかし、前を歩くＯさんの後を、景色を眺めたり、道端に咲くカタクリの花や、蕗のとうなどに心を和ませながら、楽しく歩くことが出来た。二人だけの山行、また楽しからずやと言えるのではなかろうか。

★雨の山行は「大源太山」が一番すごかったかも知れない

雨の山行と言うと、すぐ本部集中を思い出す位よく降られたものだ。そのほかにも雨に降られた山行は非常に多く、何時の間にか、それほどに雨を苦にしなくなった。雨の山行で、いまでも思い出すのは大源太山である。

日本のマッターホルンと言われる通り、山頂は切り立った岩壁で、かなり狭いが３６０度の展望は圧巻である。登り始めに曇っていた空も、いつの間にか黒雲が広がり、大粒の雨が降出した。頂上に着いても、展望どころか、休む暇もなく下山する。山頂直下の下山路は、層が下向きになっている岩盤で、足のかかりもなく、滑り落ちる様にして下りる。そして、長いくま笹の道をかき分け掻き分け進む。雨具をつけていても全身びっしょり、靴の中までぐっしょりであった。途中で雨は上がったが「よく降られたな…」という山行であった。さいわい、前日に泊まった宿で温泉に入り、さっぱりして帰ることが出来た。その後、残念ながら登る機会がない。晴天の日に、この

マッターホルンからの展望を楽しみたいと思っている。

★むすび

山行の思い出は、いくら書いても尽きることはないが、面白いもので、苦しかっ
り嫌なことは忘れ、楽しかったことが、今でも強く印象に残っている。これからも
支部の皆さんと、楽しい山行を積み重ねてゆきたいものと思っています。

☆常念岳（2857㍍）常念坊の雪形です。
常念小屋横の北西側2500㍍付近で、毎年５月上旬頃に
見られるが、１週間位で消えるとのことです。
（Ｈ５．５．５．会員・相川平司氏　撮影）

Where is the bathroom ?

祖父川　精治

ＮＨＫのテレビ英語講座を見ていたら、『トイレはどこですか？』というのに、上品に『Ｗｈｅｒｅ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂａｔｈｒｏｏｍ？』と言い換えるとよいと解説があった。

確かに、ホテルのバスルームには、洗面台、トイレ、バスタブが備えてあり、国によってはビデまで併設されてある。アンナプルナ・ダウラギリ展望トレッキングの帰り、ネパールの首都、カトマンズのホテルやレストランで、気分よく使ってみた。

高級ホテルでは、チップの必要なトイレットボーイがいる。事後、手洗いの補助サービスをしてくれる。終始、誰かに監視されているようで、慣れないと落ち着かない。なるべく、部屋のトイレで済ました方が安全確実。

山歩きで、トイレを使うことを間接的に、『キジウチ』または、女性の場合は美しく『ハナツミ』などといっている。私達の親しい山仲間では、『親戚の家へ』という。いずれにしても、仲間にそれとなく分かればよいことである。ある有名なデパートでは、店員間の符牒として『遠方』というと聞いたことがある。

昔、親しくしていた山小屋の親父がよくいっていた。山の３ムイとは、寒い、眠い、煙いと。更にもう一つ加えると臭い。北アルプスのＡ小屋のトイレ。戸板の隙間から、烈風がビュービューと吹き込む。落とした紙が、引力に従って落下するはずが、強風に煽られて天井まで舞い上がる。今まで自分の身体の一部であったものだが、外へ出るとやはり汚い。やっと捕らえ、下方の暗黒の底に叩き込んだ。

同じ、北アルプスのＢ小屋。やっと小部屋に落ち着いてみて、どうも臭い。ついてないなあ、トイレの隣の部屋かとがっかりする。様子を見にいった仲間の報告では、トイレは遥か先である。風向きによって、黄金の香りが漂ってくるらしい。

新聞紙上で読んだことである。昨年秋、登山シーズンには、多くのハイカーで賑わう秩父多摩国立公園にある、雲取山の頂上付近に水洗の公衆トイレが完成した。周辺が東京都の水がめの一つ、小河内ダムの水源林となっているため、都が１億３千万円かけて建設したものである。汚水の有機物を、土壌微生物を使って分解する方式で、日本で最も高い地点に造られた水洗トイレであるという。

丹沢大山の頂上にも、水洗トイレが設置され、伊勢原市が管理している。清掃は、下請けの地元業者が当たっている。担当者の話では、週１回清掃していたが、余りにも汚れが酷いので、今は週２回しているとのことである。週２回、トイレ清掃に大山登山する担当者の苦労を思うと、使用に際して細心の注意が必要であると誰しも感じるだろう。冬季は、水が凍結してしまうので、使用禁止の施錠をしてしまう。

スイス・フランスアルプスへ登って感心したのは、3800㍍の氷河の中、水洗トイレが清潔で気分よく使えた。ただ男性のそれが、若干高い位置なので、爪先立ちしない

とアサガオへ届かない。東京都や伊勢原市の、トイレの管理責任者はぜひ、ノウハウを勉強してほしい。

横浜西口の顔、横浜高島屋。この正面玄関前に、市が公衆トイレを設置する時、大問題になった。なにしろ、デパート側では目と鼻の所である。恐らく横浜一清潔なトイレであると思う。神奈川県下唯一の村、清川村。いよいよ、宮が瀬ダムの貯水が始まり、完成後は大勢の観光客が訪れることだろう。村では、各所に洒落た公衆トイレを建設中である。建設後、公衆トイレの維持管理が実に大変で、管理者側の努力と使用者側のマナーを期待したい。

インドやネパールの、トイレの話。

空き罐、小壺やプラスチックの容器に水を入れ、右手に持つ。事後、お尻の後からソロソロ水を掛けて、左指先で器用に洗浄する。慣れないと、ズボンを濡らしてしまう。これらの国では、太古からウオッシャブルトイレであった。食事は右手で直接食べる。左は、不浄な手として使い分ける。朝、野原へ各自水の入った容器を手に歩く人達の姿は、一片の風物詩である。水飲み用のコップにと、気に入って買ってみたら、それ用だったという笑い話がある。

ヒマラヤ登山、トレッキングへ、私達も、シェルパ、ポーター、コック、キッチンボーイを連れて行く。始めは食事時に、コック、ボーイの左手の汚れがどうも気になるが、すぐに慣れ平気になる。

チベットのある空港の公衆トイレ。個室の扉がなく、両側の壁が腰迄の実用的、そん踞の姿勢と対面。一目でどこが空いているのかすぐ分る。女性の方も同じで、飛び込んだ女性が、顔色を変えて戻ってきた。旧ソ連、パミール高原、シルクロード地方の公衆トイレも、同形のものがあった。

ブータンヒマラヤの帰り、立ち寄った国立パロ博物館内には、公衆トイレがなく外で適当に済ますようにいわれてほんとに困った。

またある国では、トイレ内の中心の溝の幅がやけに広い。腰の骨が外れるくらい足を広げ、痛くて事後やっと立ち上がる。正しい使い方は、板や石の上で済ませた後、土をまぶし棒や板で、その溝へ突き落とすのだという。シンガポールでは、公衆トイレを汚したり、事後、水を流し忘れると罰金を課すといわれる。誰が、何処で監視しているのかと思う。いずれにしても、トイレに強くならないと、外国の山や旅が楽しめない。

道南の山旅

芹沢隆仙

「風」と書いて「かざ」と読ませる『ペンション・風』は大沼公園駅から歩いてすぐの所にあった。ペンション夫婦の幼い子供が二人、庭先でボール遊びをしていた。

9月で北国だというのに、暑かった。部屋には冷房設備はなく、たまらず表へ出た。樹々におおわれた径を小沼に向かった。殆ど人影もなく、広葉樹を渡る風は涼しく、まるでフランス映画に出てきそうな風景であった。そして青い沼の彼方に、明日登る渡島駒ヶ岳の天に尽き刺さるような、荒々しくも優美な姿が望まれた。小みちの奥には鹿園があって、10頭以上の鹿が静かに戯れていた。木の古びたベンチに座り、風を受けていると、今朝3時起きで、東京始発の東北新幹線に乗り、津軽海峡トンネルを越え、慌ただしくここまで来たが、やっと旅の中にいるんだなと感じた。湖沼を渡る風はあくまでも爽やかだった。

翌朝、主人の運転で、駒ヶ岳の新6合目駐車場まで連れていってもらった。火口原である馬の背までは、火山特有のガラガラした岩の道を、ギラつく太陽を背に黙々と登る。馬の背から剣ヶ峰へのコースが続いているのだが、その取付点で道は突然消えてしまった。岩場に矢印も無い。かすかな踏み跡を見つけて、それに沿ってどうにか岩稜の一角に出たが、本当の頂上への道が皆目わからない。いくつもの道を確認したが、とうとう時間切れで、真の頂上には立てなかった。下りは更に慎重にならざるを得なかった。クサリも梯子も矢印も無いのだから、6合目のタクシーの予約時間ぎりぎりに着いた。女性ドライバーだった。

そこから大沼公園駅へ出て、函館まで列車、そして恵山(えさん)登山口まで約2時間のバスの旅。市街の雑踏、競馬場の前を通過し、長い海岸線、昆布を干した漁港を幾つも通り、狭い随道も抜ける。豪快に砕け散る白波を右に見、そして正面に恵山の荒涼とした山肌を仰ぎながら、恵山登山口バス停に16時30分に着く。電話をすると、宿の車がすぐ来てくれた。中腹にある宿からは、津軽海峡が、そして下北の恐山が見える。背後には恵山が迫っている。夜はイカ漁の漁火が煌々と輝いている。

翌朝、宿の車で賽の河原まで送って貰う。あちこちから噴気が上がり、赤い前垂れをした地蔵が幾つもあり、異様な雰囲気を醸し出していた。道は草木の殆どない岩の道を登る。一歩登る毎にせり上がり、視界が大きく開けてくる。1時間余で頂上に着いた。小さな祠があった。意外と平坦で、草木があり、穏やかである。眼下には大海原が広がり、下北も見える。コースを外れて、草の中で昼寝をした。と言っても、まだ9時過ぎだが…。暖かい日差しの中で至上の 時を過ごす。

下山は権現堂コース入口に戻り、椴法華(とどほっけ)へ向かって下る。途中、展望台からは噴火湾を隔てて、はるかに羊蹄山が見える。そこを過ぎれば、もはや緑の樹林の中、只管下って椴法華コースの登山口に出る。途中の民家で電話を借りて、宿の車を呼ぶ。漁港の見える食堂で、昼食をとりながら待つ。恵山は、標高 618㍍と低い山だが、今も生きている存在感のある山だった。椴法華の更に先に、露天の水無海浜温泉があるの

だが、それは次の機会の宿題になってしまった。（1994年９月２～４日歩く）

ブナ礼讃

丹下友恵

自分でも理由がわからないのですが、私はブナの木が大好きである。樹木には杉、桧、松、カシ、シイ、タブの木等、数えきれない種類がありますが、何か一品種と質問されたら、ブナである。若い頃に同じ質問をされたら、多分、白樺と答えたと思う何かロマンチックな雰囲気のある白樺を、青年時代は好んだと思う。

昨年、支部山行でブナの宝庫、白神岳に参加出来たことは、唯、感謝、感謝である。ブナの属する広葉樹林帯が持つ、特性の林床の下に、多様種の常緑低木や草木が繁茂し、更に良く水を蓄えるという特性を目のあたりに見て、この自然が破壊されることなく将来にむけて、永久に残さなくてはならぬとつくづく思ったものである。この白神山地は、林道建設の問題が持ち上がり、周辺のブナは大分伐採されたらしいが、反対運動のために、林道建設が中止になりましたので、その中心部は、広範囲にブナの原生林が残されました。伐採のために縮小されたと言っても、まだ規模が大きく、先年、世界遺産にも登録されたので、これからは大丈夫と思います。今後、東北新幹線が延長され、交通の便が良くなれば、多くの人が入山されると思いますが、マナーを守って、貴重な自然を次代の人々に引き継いでいかねばと思います。

我々が登った白神岳は、日本海側の白神山地のほんの入口ですが、それでも、落葉を踏めばジューッと水が出て、豊かな自然の山だと実感できました。山地の入口でこうですから、中心部は想像するだけでもわくわくものです。先年テレビで見たマタギが白神山地の中で、野営の時にイワナの味噌タタキを作ってましたが、一度賞味したいものですね。ブナの森林は、このように落葉の下に水が良く蓄えられるので、林床にも良く木々が育成して、豊かな自然を形成しているのでしょう。

春の芽吹が始まり、新緑、紅（黄）葉、落葉とブナは、四季それぞれに美しい表情を見せて我々を楽しませてくれますが、葉を全部落として、冷たい冬に凛として立つ幹の美しさは、また何とも言えません。それは、これから冬の厳しさと戦う姿でありまた下草や小木を守る母の姿に見えませんか。

幸に丹沢も自然が少なくなったとは言え、まだ至る所にブナが健気な姿を見せてくれます。支部山行で「城ヶ尾峠から加入道山」、同じく「菰釣山」八の縦走路でもブナに会わせて戴きました。函南原生林の大木も、いつまでも残っていて欲しいものです。これからの日本の自然は、ますます厳しい環境になると思いますが、支部の皆様とこの美しく、厳しく優しい大自然と接したいと思ってますので、宜しくお願い致します。

あるお母さんの山登り

長谷川　美江

私が山登りを生涯の趣味にしようと決めたのは、中学生の時、友人の母親が、伊吹山に連れていってくれた時でした。昭和２５年の初夏でした。

その方は名古屋の出身で、あちらの方は伊吹山に寄せる特別の想いがあるようです。丁度秋田市民が、太平山（たいへいざん）に想いを馳せるのと同じような例でしょうか。

国内にはそのような例が多くあるようです。

細かい事は思い出せませんが、夜、列車を降りて歩き始めました。多くの人たちと一緒だったようですから、山開きの日だったのかも知れません。

夜が明け、ご来光を迎えた時、周囲から万歳が沸き起こりました。まだ戦後数年のことでしたから。

天気の良い日でした。くだりにかかり、稲妻状に付けられた道を駈け降りて行くと、山裾を煙を吐きながら走る汽車が、玩具のように見えました。高い所から俯瞰して景色を見た時、細かいことにこだわるのはやめようと思いました。あのマッチ箱のように見える家々の中にも、人々の人生があり、悩みもあるのでしょうが、山の大きさに比べたらなんと小さな事とおもいました。まだ感性の鋭かった頃のことです。

高等学校では、同学年に１８人の女の子がいましたが、私以外は唯一の趣味は勉強と言うような人たちで、人数が少ないだけに皆仲良しでしたが、休日の過ごし方は私だけ違っていました。

次の年に入学してきた女の子の中に、山登りに付いてくるものが現れました。この年頃にとっては一つ年上と言うだけでリーダーです。今でもこの下級生の女の子たちの親が、よく出してくれたものだとおもいます。

私も子供でしたから、乗る列車を間違えたり、八ケ岳で道に迷って、野宿をしなければならないかと心配をしたり、いろいろありました。この時期にトラブルの収拾の仕方を少しは身に付けたようにおもいます。私ごときを信じて、女の子を出してくれた親御さんに心配を掛けないようにが、一番に考えたことでした。

その後、従兄が自転車会社に勤めたことがきっかけで、サイクリングツアーに興味をもちました。当時の箱根越えや日本坂越えは、トラックがたまに追い越すと言う程度の交通量でした。よほどものめずらしかったのでしょう。トラックの運転手が車を止めて「ねえちゃん。誰にも言わないから乗ってゆきなよ。」なんて。「好きでやっているんだから」と私。当時、弟の友達の間で、「僕もやってみようかな」といって、親に「男だてらに真似するな。」と言われたと言う話がまことしやかに流れました。

丁度、新ハイキングが創刊された頃で、新ハイの会員にならないかと誘われましたが、自転車の面白さに夢中になっている時でした。自転車は、まず行動半径が広いのです。一日に軽く１５０ｋｍは進めます。風をきってすすめます。

しかし、日本経済の発展とともに交通量が増え、自転車に乗る人は一日中排気ガスを吸わなければなりません。

子供が二人生まれ、ハイキングに戻ってみて、その良さに気が付きました。足元の花が見られます。小鳥の囀りが聞こえます。会話を楽しみながら登れます。

自転車の場合は、声が風にとんでしまい、前後に走っていますから、会話は出来ません。

長男が中学１年の時までは、親子で登りました。三ノ塔尾根のくだりで、私が膝を痛めた次の山行から、息子は付いてこなくなりました。あの体重は背負えないと判断したようです。

子育ても一段落して、新ハイに入会し、山行に参加する楽しみも、計画する楽しみも、味わわせていただいて感謝しています。

それも、これも良き友人を得たおかげです。

『傷だらけの百名山』　加藤久晴著

自然保護とか、地球にやさしいとか言われる時代になったが、我々山登りは一体どうなのか。やれ百名山だ、何百名山だと、有名な山に人は群がる。３千ｍの山小屋にも水洗便所を設けなければ、山の植生や下流の水質を汚濁してしまう。登山道は地肌が現れ、雨が降れば溝になって流れて、掘り割りのような道になり、歩きづらいものだからその脇を歩き、裸地は益々広がってゆく。戦後の植林政策は黒木を植えることのみに専念した結果、広葉樹の実や下草などを食料としていた動物達は、住家を追われ人里にまで食べ物を求めて出てくる。

乱開発によって首都圏の水源は枯渇して、給水制限は年中行事となってしまった。今頃になってブナなど、広葉樹の有り難さが分っても、酸性雨のせいか、大気汚染のためか、丹沢のブナなど枯れていくばかりである。

「傷だらけの百名山」（リベルタ出版、1900円）は、たくさんの人が山を歩き自然に親しむのは、大変よい傾向だ。が、同時に各地の名山で、深刻な自然破壊が進行している。この本では、まさに傷だらけになろうとしている各地の名山の実態が報告されている。又、長野冬季オリンピックによる破壊も詳しく告発している。山を愛する人は是非読んで頂きたい一冊である。（熊谷）

北海道・心に残った山々

御園培博

前回（２９号）及び前々回（２８号）の歯朶に「定年と山と新ハイの仲間達」という標題で拙文を掲載させていただいた。前々回は、定年間近の心境、前回は定年を迎えてからの心境を語っている。そして、今回は、定年後、５年間通った北海道の山、そのなかでも特に心に残った山について記したいと思う。

☆　十勝岳（２０７７．０ｍ）

北海道のほぼ中央にあって*北海道のへそ*ともいわれており、十勝連峰の最高峰、現在も火山活動は盛んで、最近では昭和３７年に大爆発、昭和６３年には小規模な爆発をしている。登山口の望岳台から山頂まで全コースが、かっての大規模な爆発による火山灰や火山泥流の跡で、特に昭和３７年の大爆発によってできた火口からは現在でも盛んに噴煙を上げている。山頂からの眺望は、３６０°、まさに“これが北海道だ”という大眺望である。（Ｈ３．９．５，Ｈ５．７．１７）

☆　富良野岳（１９１２．２ｍ）

十勝連峰の南端に位置し、連峰中、随一の高山植物の宝庫である。登山口の十勝岳温泉（後述）から３０分で、安政の大爆裂火口壁の直下に着く。現在もいたるところから噴煙を上げており、見上げる火口壁の威容には、自然の力強さというか恐ろしさに、ただ圧倒されるだけである。火口の直下で右に回り込み、尾根を越えると緑濃い山容に一変する。左上部の上ホロ山から三峰山を経て富良野岳を結ぶ十勝連峰の主陵の山腹を富良野岳目指して登るのであるが、この付近から高山植物が山頂まで次から次へと続くのである。山頂からの眺望は、足下の富良野盆地につづいて夕張山地、また、来し方を振り返れば、山頂からつづく十勝連峰の主稜上に三峰山・上ホロカメットク山、端麗な山容の十勝岳、そして荒々しい美瑛岳が望め、その先遥かに広大な大雪山系が特徴のあるトムラウシ山を前景に広がりを見せている。（Ｈ３．９．７）（Ｈ５．７．１８．）

☆　十勝岳温泉（凌雲閣）

標高１２８０ｍと、北海道でもっとも高いところにある温泉。地下の浴室から１階のロビーまで突き上げた大きな石柱が建物の大黒柱となっている。ここの露天風呂は、断崖の上にあり、正面に前記の安政の大爆裂火口を望むことができ、ロケーションの良さは、他に類をみない。男女混浴であるが、男女それぞれの内風呂から

入れるのと、温泉の種類が酸性緑礬泉とナトリゥムイオン泉の混合で、茶褐色をしていることから、女性も安心して入れるので、訪れる機会があれば是非勧めたい。入浴のみもＯＫ。（Ｈ４．８．２５，Ｈ５．７．１６泊）

☆　雌阿寒岳（１４９９ｍ）☆

５年間で２回挑戦したが、２回ともガスの中、残念ながら眺望はゼロであった。ただ２回とも下山したオンネトー湖からは、すっきりと晴れ上がった雌阿寒岳を見ることができた。歩いた感じでは一級の山であることには間違いない。

（Ｈ３．９．６，Ｈ６．７．１６）

☆　斜里岳（１５４７ｍ）

斜里岳を下山し、オホーツク海岸の斜里町から見た斜里岳は、広大なジャガイモ畑を前景に左右に雄大な裾野を広げた独立峰で、とても１５００ｍ程度の山とは思えない容姿をしていた。

１回目は、途中降雨のため無念の敗退であったが、２回目の挑戦では快晴となり最高の気分を味あえた。登山口の清岳荘まで車で入る。最初から沢沿いの道をたどるが、飛び石伝いに右岸、左岸を何回か渡り歩く。勾配がきつくなると次々と滝が現れる。壮快な気分にさせてくれるところである。やがて水流はなくなり源頭となる。その先、胸突八丁の急傾斜を登り詰めると稜線上の馬の背に着く。突然前方の視界が開け、眼下にオホーツク海の海岸線と知床半島が一望できる。左手急傾斜を登り詰めると山頂は目の前、ひと登りで広い山頂に着く。目の下には右手知床半島から左手宗谷岬方面に至る壮大なオホーツクの海岸線が横たわっている。明日登る予定の羅臼岳が知床半島の主峰として雄大な山容を見せている。あまりにも素晴らしい景観に立ち去り難く長時間の滞頂となってしまった。（Ｈ３．９．５，）

（Ｈ６．７．１７）

☆　羅臼岳（１６６０．２ｍ）

知床半島の最高峰羅臼岳の山頂からの眺望は、北へ伸びる北海道東海岸の海岸線とオホーツク海の途方もない広さにただただ圧倒されるのみであった。昨日、斜里岳下山後、知床半島の海岸線を車で走ったが、左手オホーツク海の夕景の美しさも忘れ難い景観であった。（Ｈ６．７．１８）

☆　カムイワッカ湯の滝

知床半島ウトロから知床５湖を経て知床林道（未舗装）を北上すること約３０分カムイワッカ川を渡ったところで車を置く。朝ホテルを出る前に水着は着用済み、ビーチサンダルに履き替え沢筋に降りる。沢床は広く滑状で歩きやすい。水温はほ

のかに暖かさを感じる程度で、これで温泉のように暖かくなるのか疑問を感じたが、高度を増すにつれ温度が次第に上がっていく。約３０分で大きな滝壺を持った滝が現われる。流れ落ちる滝からは湯気が上がり、滝壺には数人が入っている。我々も入った。まさしく温泉である。大自然の中の天然の岩風呂である。いうことなし。（Ｈ６．７．１９）

☆ 礼文島

稚内から乗船したフェリーは、小雨まじりの強風のため上下左右に大きく揺れ、船上から眺める利尻山の偉容にあこがれていた気持ちに暗雲を閉ざした。フェリーは、大雨となった礼文島香深港に着岸、出迎えの車で民宿へ向かう。朝方までつづく大雨と強風に睡眠もままならなかった。残念だが礼文岳は割愛し、礼文島横断の山旅に切り替えた。が、しかし、バスを降り、歩き始めるにつれ、雲は動き晴れ間が急速に広がつていった。バス停まで戻ってもバスは午後までない。そのまま変更ルートを歩くことにした。案内書にもないルートであったが、これが素晴らしい道で、特に後半の日本海に向かって下る沢沿いの道は、高山植物が咲き誇っており、時間のたつのも忘れるほどであった。最後は、沢がそのまま滝となって日本海海岸に落ちており、知床半島のオシンコシンの滝のような道路もないので、観光客もおらず、野趣に富んだ風景であった。（Ｈ７．７．１４）

☆ 利尻山（１７１８．７ｍ）

昨日乗船した稚内から礼文島へのフェリーは、悪天候であったが、礼文島の山旅を終えて利尻島に向かうフェリーは、打って変った好天候の海を進む。船上から利尻山を仰ぎ見ながら鴛泊港に着岸した。港から５分の今夜の宿ペンションヘラさんの家に荷物を置き、ペシ岬展望台に登る。ペシ岬は、鴛泊港から突き出た岬で、標高９３ｍ、１等三角点もあり、眼下の鴛泊港を基部として、天空にそびえ立つ利尻山の眺望には言葉もなかった。

さて、翌朝４時ペンションを出発、標高わずか１０ｍから登りはじめるのである。上空は晴れているものの利尻山は、３合目付近から上は暗雲が垂れこめ、山容は望めない。ところが登るにしたがい雲は薄れ、７合目付近で遂に雲一つない快晴となる。１０時３０分、久恋の山頂に立つ。イソツツジの群落に赤く染められた山頂付近の断崖は、眼下の紺碧の海と青空をその背景としており、シャッターを押す手も心なしか震えていた。下山は往路を戻ったが、ボン山の手前から右手に別れ、姫沼を訪れた。ペンション着午後４時、歩程１２時間の記憶に残る山行であった。（Ｈ７．７．１５）

ありあけ

ゴールデンウイーク

奄美大島クルーズ

鈴木 力雄

新橋からゆりかもめに乗る。レインボーブリッジを渡ると、日本離れをしたウォーターフロントの風景が広がる。有明埠頭に日本最長定期航路のフェリー「ありあけ」がいた。５月２日、17:00 に出港。これから３５時間、奄美大島までの３日がかりの航海が始まった。暮れなずむ埠頭を出て暫くすると、ネオンやライトに東京港、横浜港が浮かび上がる。翌朝は晴天、甲板に出て太平洋の海原をみたり、甲羅干しをする。若いアベックが海風に吹かれながら、仲むつまじくブランチをしている。こっちはビール。パートナーはウォークマン。

「ありあけ」は、8,100 ㌧で巡航速度２２ﾉｯﾄ（時速に換算すると約40㎞）。乗用車１００台、コンテナ 348個、トラック50台、乗客 140名が乗れる貨客船である。

果てしなく続く太平洋、群青の海にときどき飛魚が舞う。飛魚の羽は零戦みたいで主翼尾翼の４枚構成。 100㍍ぐらい軽く飛ぶ。乗客サービスで機関室の見学をする。ディーゼル２機の騒音と高温に圧倒される。ブリッジ（船橋）見学でキャプテンの双眼鏡を覗いて船長気分になる。レーダーで周辺の島影や航行する船舶の状況がわかる。海図にＧＰＳの位置を落として現在地を確認する。行きは黒潮を避けて陸岸寄りをはしるとのこと。潮岬が見えて紀伊水道に掛かり室戸岬、足摺岬と続く。鹿児島の志布志港に19:00 入港。船首と船尾にスラッター（一種のスクリュウ）があるので、いとも簡単に接岸する。

４日6:00に名瀬に着く。奄美は　一月に３５日雨が降るそうで、曇り空に少し雨が混ざる。同じＬＩＮＥの「あまみ」に乗り換えて、奄美大島南部の古仁屋まで２時間で行く。古仁屋の対岸はトラさんも出た加計呂麻島。その間が大島海峡。半潜水式水中翼船「せと」で水中散歩をする。透明度の高い青い海に、色鮮やかな珊瑚礁が広がり、トロピカルフィッシュが泳いでいる。目を見張るばかりの美しい自然、まさに夢と神秘の世界に船中嘆声に埋まる。　古仁屋から途中マングローブの原生林をみて名瀬にいき、ホテルに泊まる。

５日は、定期観光バスに乗って、奄美大島北部巡りをした。西郷隆盛が僧月照との心中に失敗した後上陸した地点、愛加那と過ごした家屋、茅葺きの高床式の小さなもので、あの西郷どんが２・３歩あるけば、外に出てしまいそうだ。ピーカン村ばしゃ山、典型的なトロピカルリゾート。珊瑚礁が打ち上げられて細かい砂になった真っ白な海岸に南国の青い海が似合う。娘さんがシュノーケルをつけて泳いでいる。あやまる岬は蘇鉄の群生する展望台。左手に見える笠利崎を境にして右が太平洋、左が東シナ海、境のちょっと沖で１０人のダイバーが、昨日潮に流されて遭難騒ぎにあった。

大島紬観光センターを見て、はぶセンターは割愛して奄美博物館をみる。戦後の貧しい生活と、アメリカの施政から本土復帰への熱い思いが、今につながる。

５日、17:00 ありあけに乗り名瀬を出港した。

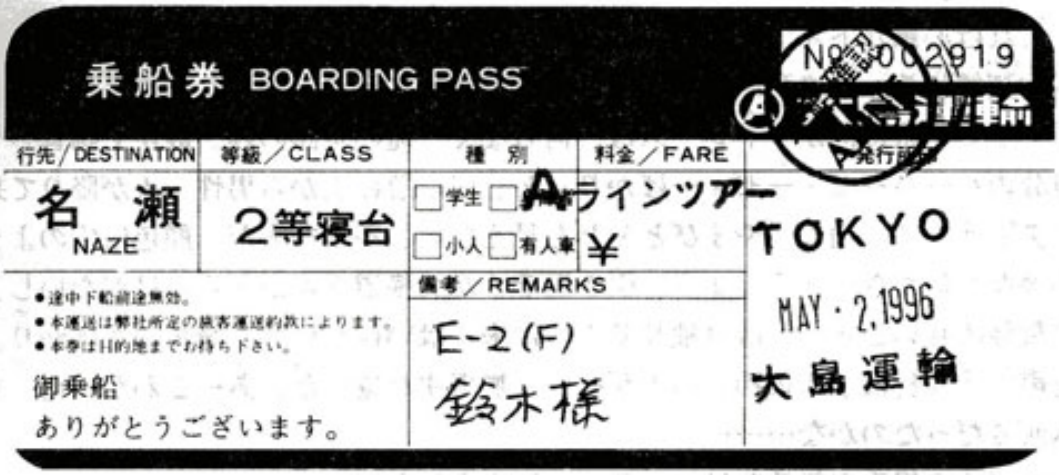
翌６日は終日船中。船旅というものは、癖になるものらしく、船客からＱＥ２、飛鳥、サブリナ、クリスタルシンホニーなど、乗った船の名前が出てくる。当方、船といえばフェリー経験のみ。蘊蓄に頷くばかり。帰りは黒潮に乗って快調にとばす。相対速度は１８ﾉｯﾄで、絶対速度は２５ﾉｯﾄ。黒潮の影響は差し引き７ﾉｯﾄというのも耳学問の成果。パートナーがイルカを見たという。向こうからきて船首手前で二手に分かれ、船尾方向へ手を振りながらいったとのこと。どこにいるか。いない。今は土佐沖、今度は鯨を見付けるという。刺身になるならともかく、こっちはリアリストだ、ビールがいい。

紀伊水道に掛かると、風の通り抜けのせいか（？）白波が立って揺れる。ローリング（横揺れ）はフインスタビライザーで防いでいるけれど、ピッチング（縦揺れ）は如何ともし難いとのこと。潮岬に掛かって嘘みたいに消えた。

７日、朝日とともに三浦半島が見え、観音崎を経て東京湾に入る。定刻８時に有明埠頭につき、我が豪華クルーズ（？）は終りぬ。

（フェリーによる船旅がクルーズであるかどうかについては諸説がある。しかし、ｃｒｕｉｓｅはクルーズだ。？）

旅行代金	@42,800円（船、ホテル１泊２食、水中観光船）
名瀬～古仁屋　船賃	@ 1,430円
定期観光バス	@ 2,500円


乗船券 BOARDING PASS
No. 002919
大島運輸
行先／DESTINATION: 名瀬 NAZE
等級／CLASS: 2等寝台
種別: □学生 □[illegible] □小人 □有人車
料金／FARE: Aラインツアー ¥
発行所: TOKYO MAY・2,1996 大島運輸
●途中下船前途無効。
●本運送は弊社所定の旅客運送約款によります。
●本券は目的地までお持ち下さい。
御乗船
ありがとうございます。
備考／REMARKS
E-2(F)
鈴木様

『さそわれて丹沢大山』

飯島和子

丹沢山塊、近くて便利で四季を通じて楽しめる、その上格安、山に値段はつかないが安上がりが、又何とも心をウキウキさせてくれる。下りれば温泉、これもいい。

今から、？年も昔、19才の時、始めて「小田原山岳会」の人に連れられ、表尾根を登ってから、数え切れない回数を登っているが、あの頃から比べると、私自身も老境に入り、足腰が軟弱になってきたが、山々も荒れ果て、いたる所崩壊の場面にでくわす。山肌にそっと足をおろし、いたわって歩きたい。そんな思いで歩いているこの頃です。大好きな丹沢での、心に残る想い出のあれこれを書いてみました。

『春』

バレーボールの仲間と、相州大山に登った時、山頂で今まさに結婚の誓いを読み上げ、新郎新婦が出来上がった場面に出逢った。私達も一緒に、お神酒をいただき、お祝いの署名をし、皆んなでアーチをつくり、この中を新郎新婦がくぐりぬける。感動した一コマであった。あの時の御夫婦は、その後、円満――でしょうね。

『夏』

山の尊敬するリーダーと、勘七の沢を遡った時、怖いもの知らずで、山の技術も何も分からない私を、自然体のまま登らせてくれた。F1から始まる滝の連続も快適に遡行できた。改めて、リーダーの心の大きさを思い、忘れられない沢登りの経験を味あわせてくれた。その時のリーダーの履物は、重い皮の登山靴。私は勿論、草鞋だったけど。

『秋』

通い慣れたイタツミ尾根を、単独で歩いていた時のこと、追い越した子供連れの夫婦が何か気になる。奥さんの方がバテていたらしい。引き返し、子供をおぶってやり、臨時のボッカ訓練をさせてもらった。あの時の男の子は、高校生になり、月日の流れの速さにとまどうこの頃です。

『冬』

これは心臓がドキドキした、こわーい話。或る年の1月3日、昨夜からの雪も止み、雪山訓練にチャンス到来とばかり、独りで大山に行く。蓑毛から歩き、ヤビツ峠からイタツミ尾根に向かうトレースは、何もなく、兎の足跡のみ。静かで物音一つしない、自分のハーハーゼィーゼィーばかり。と、何か急に上から男性一人が降りて来た。ザックも持たず、山人（やまびと）とも見えない、不審な人だ。顔色は雪のように白く、華奢な身体つき。どうしょう、引き返そうか、横道なんかあるわけがないし、この時の数秒の長いこと、やはり独りで山へは来てはいけないと、後悔の念ばかり。かすれた声で「今日は」の挨拶、返事がない、無事すれ違った。あーこわかった。あれは一体何者だったのかな……。

その時の相手の気持ちは……？　知るよしもない。

山行の想い出

星野 喜美子

奈良、京都の旅を楽しんでいた私が、４０歳を過ぎてスキーにのめり込んだ。白銀に輝く上越・信州の山に魅せられ、何時かあの頂に登りたいと熱望し、ポツポツ始めた山登りもいつしか２０年を過ぎ、望み通り沢山の山に登らせて戴いた。

最初は志賀高原、霧ヶ峰、　美ヶ原から北八ツと歩き、尾瀬、白馬岳と登った頃、会員だった姉に「靴の履き方から歩き方まで、親切に教えて下さる良い所」と聞いて新ハイに入会し、間もなく横浜支部の例会に出席して会員になりました。

以来、良きリーダー　良き先輩に恵まれ支部、本部、個人併せて、年平均30～60回の山行を続けることが出来ましたのは、横浜支部の皆様のお陰と感謝しております。

心に残る山

６１年６月“歩程９時間逃げ道なし”前夜発　白毛門～朝日岳～清水峠～清水。“迷惑を掛けるだけ”と、申込まない私に「大丈夫、行きなさいよ、駄目ならザック持つから」Ｙリーダーの言葉に涙。

朝４時土合から歩き始め、残雪の谷川岳、マチガ沢を眺めながら白毛門～朝日岳と急登の連続。降り出した小雨の中を清水峠へ。避難小屋で休憩後、後は下るだけと喜んだのもつかの間。雪が谷を埋め尽くしていた。雪渓のトラバースを繰り返し徒渉もある。雪の上をうまく歩けない、一本橋が渡れない等、リーダーはその度に、あっちこっちと大変でした。

トップを歩くＩさんは黙々と、しかも確実に道の無い所からある所へと全員を導いて行く。夕闇迫るころ、心配し通行止の林道の奥まで、迎えに来た上田屋さんの車を見た時は本当に嬉しかった。歩けばまだ１時間はあろう。この日の行動時間は実に１３時間余り。山には予期せぬ出来事(雪)があるのですね。

リーダーの参加者に対するこまやかな心遣い、弱い者への暖かい思いやり。全員の安全の為細心の注意を払うＩさん。《リーダーとは、サブとは、どうあるべきか》「ただ連れて歩くだけがリーダーではない」と、この時に学んだように思います。

この山行は後に一つのロマンスが芽生え、数年後、素晴らしいカップルが誕生しました。私にとって一つの転機となった、心に残る山行でした。

長時間歩行

鈍足の私には、ベテランと一緒の“長時間歩行は無理”と思っていましたが、白毛門を契機に、歩程１日６時間の目安を少しずつ延ばして行くことを心掛けました。

そして歩程１日１１時間まで、なんとか歩けるようになりました。しかし　縦走かピストンか、ザックの重さによっても行動時間は大きく変わります。

縦走の山

大雪山～十勝岳　屋久島雲水峡～宮之浦岳～永田岳～淀川のように、山中３泊となるとそれこそ「鍋釜、寝袋背負って」。今はレトルトとか、アルファ米とかあるけれど、ミジメーになりたくないので、あれもこれもと大変です。大雪は５名、仙台から苫小牧にお昼過ぎ上陸して、旭川で買物。最終のロープウエイで旭岳石室泊。翌日３時半出発、旭岳～白雲岳～忠別小屋行動１３時間余。翌日忠別小屋４時～化雲岳～トムラウシ山～ヒサゴ沼避難小屋行動１１時間半。次の日天人峡へ下った時は、豆が潰れて足は真っ赤に腫れ上がり、爪は押されて黒くなっていた。それでもめげずに、痛む足を引きずり十勝岳へ、この山は半日行程でサブザック、さすが最後の富良野岳は雨もあって中止。観光に切り替えました。

屋久島は朝羽田を発って、鹿児島で乗り換え屋久島空港へ。機内はガスの持ち込み禁止とかで、事前にコンロ５台を共同調達。途中ホワイトガソリン20ℓを仕入れ、白谷山荘泊。翌日４時出発縄文杉をへて新高塚小屋行動８時間。３日目新高塚小屋３時45分出発宮之浦岳～永田岳～黒味岳～淀川小屋泊行動１２時間半。

ちなみに屋久島は21名、最低10㌔最高35㌔、これは自分の持物だけの者と、鍋釜、コンロ、ガソリン等、共同装備を分担した者。各自が10食分用意した食料の、デザート付お食事か、満腹になればよい餌？の差でした。

ピストンの山

始めてのグループについて、大無間山～小無間山を登ったとき、のろまの私は食事と支度を20分で出来ず、慌てて車へ置く荷物まで背負い、水５ℓも加わり５時間の登り、リーダーに迷惑を掛けてしまった。しかし翌日の朝３時出発行動12時間は、ピストンなので楽でした。この時の参加資格は、男性２５㌔、女性１８㌔以上背負える者でした。

次の砂武流山は、残雪期にしか登れない山なので、これにテントと防寒具が加わり、６時間の登りは、重荷で雪に足を取られ辛かったけど、翌日はテント場からピストン出発４時行動11時間半と雪を楽しみながらの山行でした。

もう二度と登れない山ばかりですが、大勢の方々にお世話になりながら、登らせて戴いた山です。苦しい中にも、楽しい思い出が一杯詰まっています。重いザックを背負ってのテント山行も、避難小屋泊も出来ないけれど、これからは、もう一度登りたい山。登り残して気になる山を、気の合った仲間や、主人とゆっくり楽しみながら、歩きたいと願っております。

『塩の道』　120キロの話

山田　進

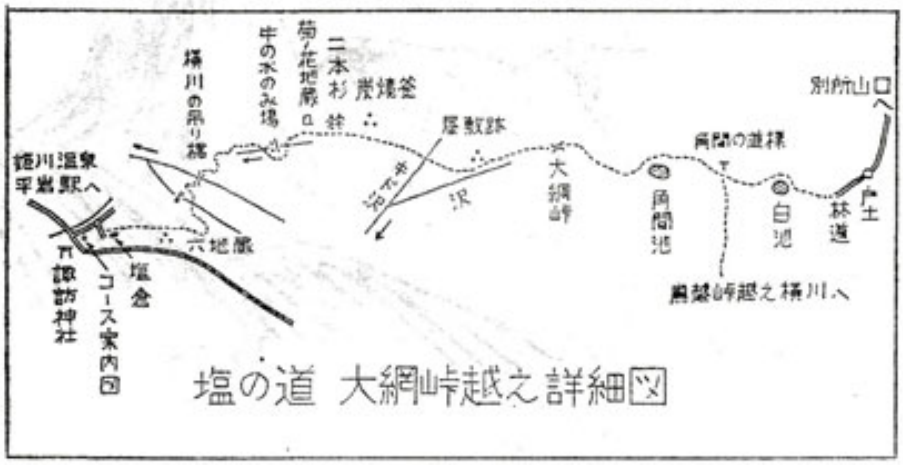
塩の道・大網峠

仕事で安曇野にいた折り、松本から糸魚川の「塩の道」（千国街道）を歩いてみました。きっかけは、たまたま信濃毎日新聞社発行の「塩の道を歩く」という一冊の本を手にした時より始まりました。

塩の道と言えば、戦国時代の義捐の話ぐらいしか、頭になかったのでしたが、歩いてみて、当時の歩くこと事態が大変だったこと。又、現在の国道は姫川に沿って造られているが、当時は暴れ川で、道は山の中に造られており、生活の道が突然人が通らなくなった為に、今や過疎化してしまった部落、その他いろいろなことを体験できました。

そんなことで、千国街道をどうやって歩いたかですが、本には5万分の1の地図に赤線で示してあったので、2万5千分の1の地図を買って、にらめっこしながら、コースに線を引いていきました。それで分かったことは、地図上にはもはや、点線も無ければ、こんな所に道があったことすら分からない。地図と周りをにらめっこしながらの道探しでした。もちろん観光地化したあたりは、道標も道もしっかりしていますが、人の住んでいる所で道を探すのも大変。見当をつけてそれらしい道があったので、歩いて行くとそこは墓地、まだまだお呼びではありません。よく木の中を見ると一本の線を引いた様な空間を、ヤブを漕いで行くとよく踏まれ、苔むした道が続く。昔に帰った様な錯覚を起こしてしまいました。

そうかと思えば、道は跡形もなく、ダンプに恐れながら歩いたり、雪崩あとでは、ほんの数百㍍先に道があるのがわかるので、強引に入って行くとヤブで、下の方へ落ちそうになり、やむなく林道に戻って遠回り。大網峠では雨飾が懐かしい山です。千国街道全体を見ると、殆ど道標はなく、（大分前に作った道標も朽ちて倒れたまま、こんな道標でも見つけると、間違っていなかったとほっとしましたが）石仏の多かったこと、一ヶ所に百体くらいもあるかと思えば、山の中の一つの石仏、ほっ



塩の道　大網峠越え詳細図